全体研修会　　2学期以降**学校研究とどう取り組むか**　　18年9月14日

◆研究主題　**人と自然とのかかわりを通し**

子どもが「生きる力」を発揮する学習活動の創造　　＜1年次＞

1　一学期の授業実践で見えてきたこと
対象との「かかわり」を意識した
――人と自然とのかかわりを通し（主題の前半部分）――

(1)　対象（体育では人と・いのちでは自然や虫など）とのかかわりを意図的に学習内容に組み入れることの意義を感じる。
①かかわりを生むための「対話」活動
②身体表現を見合うというかかわりの中で自然に行われている、身体を通しての間接対話
(2)　植物との世話ができるということは、植物との対話ができているということであった。
＊水かけを一生懸命にしていない子は、「対話してごらん」と言われてもできなかった。
＊植物とかかわれない子は、友達ともうまくかかわれないようだ。
(3)　一人ひとりのかかわりの様子を記録する必要がある。
＊授業研究会のとき、指導案とともに、かかわりの記録（座席表に）が提示されていたのが、良かった。個別目標を立てて、授業に臨むために。
→教師の授業技術を見て検討する校内研修から、*子どもの「育ち」の姿を見て語り合う校内研修へ*　　（藤井千春　佐竹先生からいただいた資料から）
(4)　授業は授業、生活は生活と乖離しないように研究を進める必要がある。
＊私たち教師がまず、自分自身のさまざまな対象とのかかわりを自己吟味することか。

2　二学期以降の視点の提案

(1)「かかわる」力を高めることが、学ぶ喜びを感じさせることにつながる

①教材開発　　・自然に「かかわり」が生まれるような教材
　　・興味をもつと、かかわりたくなる
②かかわる対象の広がり　　見える対象から見えない対象へ（発達段階もあるが）
③日常の教室に、かかわれる雰囲気作りを　　授業研究だからではなく

(2)「生きる力」を自己教育力と捉え、できているところを大事に子どもに自信を持たせることが、よりよい自分を求めて伸びようとする子どもを育む
（今年度は日常の教育活動全体で意識する。具体的に指導案にはださなくても）

全体

3　子どもを伸ばす研究となるために

つけたい力を明確に持つ

(1)　教師が付けたい力（子供に）　　学校全体で

①聴く力　　人の話は黙って聴く
②音読する力　　すらすら読める力
③反応する力　　話す力　　説明する力
④見る力　　見えるから気づく　気づくから言葉になる　見る力は全ての基本
⑤かかわる力　　学び合う力　　響き合って新しいものを生み出す力
⑥自己教育力　　生きる力　　自分の学習のかじを自分でとれる力

(2)　学級づくりにおいて大切にしたいこと

①集団の自立　　教師がいなくても、自分たちで進められる（運動会の応援団のように）
②学級の「かかわる力」の実態を見つめ、改善すべきところを明らかにして取り組む
③一人の問題はみんなの問題として考える
④目標を持ち、反省しながら向上していく
⑤学級内で遣われている言葉を吟味する

どんな学習活動で

この部分を研修する機会が
授業提案か

見る力　　記録活動が重要
・観察して言葉にする
・何を見ているか　見れども見えず
・俳句を作ることも見る力を伸ばす

自然との対話の重要性
自然からは多くのことを学べる
・アサガオ、稲などの学習の意義を再認識
・自然に従い、自然にかえれ
（・・・・ビオトープ）

学習者の自立とは
・学習することの意義、楽しさを知っている。
・何を学習するべきか判断できる。
・自分の能力の向上、現在の理解状態に関心を持つ。
・わかっているところ、わかっていないところが、自分で分かる。
・自分に適した学習の方略を知っている。あるいは、探索、検討する。
・分からないときには、どうすればよいか（他者に聞くことも含めて）知っている。
市川伸一『開かれた学びへの出発』p.55

全体